~ いざカンボジア王国へ! 2021年1月~

JICA 長期専門家(カンボジア)小松海里

カンボジアから、新年明けましておめでとうございます。例年であれば、穏やかな年をお迎え......と書くところですが、今年の日本はどのような感じで正月を迎えられたのでしょうか。

こちらの状況を心配していただくことも多いので、カンボジアの COVID-19 の状況を報告しておきたいと思います。カンボジア保健省の発表では、1月15日時点で 426人の感染者が報告されており、381人が回復しているとのことです。このほとんどがカンボジア国外からの流入事例です。昨年11月末にほぼ初の市中感染が確認報道され、患者に関係する職場や店舗の一時閉鎖、接触者の検査、会議の中止や延期など一時慌ただしくなりました。その後は感染者数が多くはならず、再び比較的落ち着いた雰囲気となっています。多少は形骸化しつつあるものの、昨年の1、2月ころからマスクの普及や公共施設、スーパーマーケット、レストラン、カフェの入り口などでの検温と手指のアルコール消毒が行われています。

パンデミックということでスペイン風邪が引き合いに出されます。私の曽祖父は上海でこの病気により亡くなったとも聞いていましたが、おおよそ 100 年前の出来事で、このようなことがまた起こりうるとは思ってもいませんでした。カンボジアは医療レベルが高くないため感染した場合のリスクが高いので、私たち JICA 専門家は避難ということで 2020 年4月に日本へ一時帰国しました。

2020 年 4 月 5 日: プノンペン空港発、6 日: 成田空港着、成田市街のホテルにて 2 週間自己隔離、21 日: 自己隔離終了、千葉の実家へ

4月~8月:遠隔でプロジェクト進行 国土交通省、JS、関係者と打合・情報交換

9月2日:日本にて SARS-CoV-2 陰性証明取得、4日:成田発韓国仁川経由プノンペン空港 着 空港にて SARS-CoV-2 検査の検体採取、5日未明:隔離ホテル到着、6日:陰性結果報告 により隔離ホテルからプノンペンの自宅に戻り自己隔離、18日:2週間後再度 SARS-CoV-

2 検査陰性確認、21 日より通常業務に復帰、というような動きをしていました。

カンボジア出発直前には、緊急事態宣言の法案が可決される見込みで、ロックダウンされるのではないかという噂もありました。残り数便の日本行きの飛行機に乗るため人通りのなくなった道を空港へ向かい、人のいない薄暗い空港で無事に離陸できるか……と脱出映画の登場人物になったような気分でした。

こちらでの検査は Institut Pasteur du Cambodge という、衛生 工学でもお馴染み、生化学・細菌学者ルイ・パスツール先生のお 名前を冠した研究所で行われています。病気と戦った偉人にあや かりたく、胸像にご挨拶しました。



新たな年が健やかとなることを祈念しつつ、本年もよろしくお願い申し上げます。

カンボジアに来てから1年半ほどたって、やっとアンコールワットに行ってきました。



上の写真は、観光用バルーンからアンコールワットを眺めた景色です。12 世紀初頭、時の王様スールヤヴァルマン二世が創建したヒンドゥー教の施設で、いまは仏教寺院として機能しています。802 年から 1431 年この地方を治めたアンコール朝は、最大時はインドシナ半島の大部分とマレー半島の一部までを版図とする大帝国でした。支配範囲の全土に数百を数える遺跡が残っているようです。写真の背後は密林のように見えますが、このなかにも大小さまざまな遺跡があります。



左の写真はスラ・スランという、王が 沐浴するために造られたという池です。 王様一人のための施設としての広大さに も驚かされるのですが、水の清浄さにも 目をひかれました。こういった池はこち らでよく見かける粘土・シルトが混じり 濁った水かアオコが浮いたような水を勝 手ながら想像していたのですが、この池

もアンコールワットの環濠なども(カンボジアに来てからあまり目にすることのなかった) 透き通った水を湛えているのです。遺跡周りは世界遺産登録されているとはいえ集落やレストランもありますが、汚水が遺跡の水に混じらないように建設、管理されているのかもしれません。

この一帯は湿地かジャングル様のところに建造物と人工湖が点在する感じです。アンコール遺跡群に行く前は、それらは王朝の絶大な権力に基づく政治的宗教的なものと思っていました。巨大なモニュメントにより為政者の絶大な権力を見せつけることが歴史の中で多く行われてきました。一方で、水の管理と食料の確保も古代から為政者の大切な仕事でした。実際に現地に行って思い浮かんだことは、もしかしたら、この遺跡群はその両方を達成した治政の跡なのかもしれないということです。

遺跡自体はレンガか砂岩とラテライトといわれる岩で作られています。この建造物を造

Copyright©2021 日本下水道事業団技術戦略部

るための整地に土が使われ、その土を掘った個所が人工湖になっているのかもしれません。 その結果か意図的か、人工湖は治水、利水の役に立っているのだろうと思われます。

カンボジアは 2~4 期作できると耳にするため、農閑期がないのかと思っていましたが、 それは溜池などの灌漑施設ができた今の話で、昔は雨季の1回きりだったかもしれません。 エジプトのピラミッド建造で言われるようなことと同じく、アンコール遺跡の建設も農閑 期の公共事業の可能性もあるのかと思いました。

いまのカンボジアの都市では、都市計画が定まらないまま、もしくは計画を無視したような開発や埋め立てが進んでいる状況もあります。どこの湖を埋めたからどこが浸水するようになったという会話も耳にすることがあります。無計画な開発が水環境や治水への悪影響とならないようにしなければいけません。



上の写真は、アンコール遺跡群の南側、カンボジア中央にあるトンレサップ湖の中にある水上生活者の集落の様子です。トンレサップ湖は東南アジア一大きく、乾季で 2,500 平方 km、雨季で 16,000 平方 km と大きくサイズが変わる、メコン川から逆流した水が入ってくる、など面白い特徴を持っています (cf. 琵琶湖 669 平方 km)。陸に居住できないカンボジア人、ベトナム難民、国籍を持たない人たちもいて、政府は水上生活者を減らそうとしているようですが、100 万人以上が生活しているとも言われています。写真のような個人の家屋以外にも商店や学校、宗教施設、観光客向けの 2 階建てレストハウスなどもあります。私たちの乗った船が水上のガソリンスタンドで燃料補給したり、小さな子供が船を操り行き来したりしているのも印象的でした。

2018年にアンコール遺跡群を訪れた観光客は260万人近くに達していましたが、2020年は前年比98%程の減となるようです。カンボジア人の来客は増えたようで、遺跡によってはカンボジア人の中に私だけ日本人という状況もありました。国家資格を持つガイドさんをお願いしたのですが、遺跡管理者やお土産物屋さん、カンボジア人観光客が結構な頻度でガイドさんに声をかけてきていました。何かと思ったら、ガイド制服を久々に見た、やっと外国人観光客が戻ってくるのか、と期待の声をかけられていたようです。

2021年、日本からカンボジアへ出張と観光に来られるような世の中となりますように。